

### 1. 現在の発掘調査状況（A区）

8月からA区の調査が始まりました（第1図）。前回のたよりでは、遺跡は西に向かうほど緩やかに低くなるとお伝えしました。表土をはぎとっていくと、S字状に曲がる黒い土が現れました。この土層断面を調べると、昔の川跡であることがわかりました（第2図）。

今回は、土橋北遺跡や周辺の遺跡で見つかった昔の川跡についてお話したいと思います。

### 2. 遺跡周辺の川跡

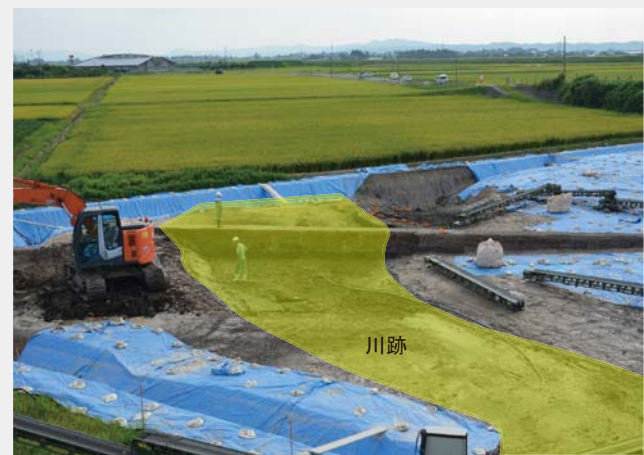
第3図は現在の遺跡周辺の地図に、地形分類図（建設省 1984）を重ねたものです。赤いところは自然堤防を示したもので、地面が周囲よりやや高い微高地となっています。現在の集落の多くは、この自然堤防の上に立地しています。

青の部分は旧河道（昔の川跡）で、色の薄いものと濃いものがありますが、濃い方が現在でも河川の跡がはっきりと残っている場所になります。現在は水田となっていますが、この付近を歩くと田んぼの高さが周りよりも一段下がっているのがわかります。

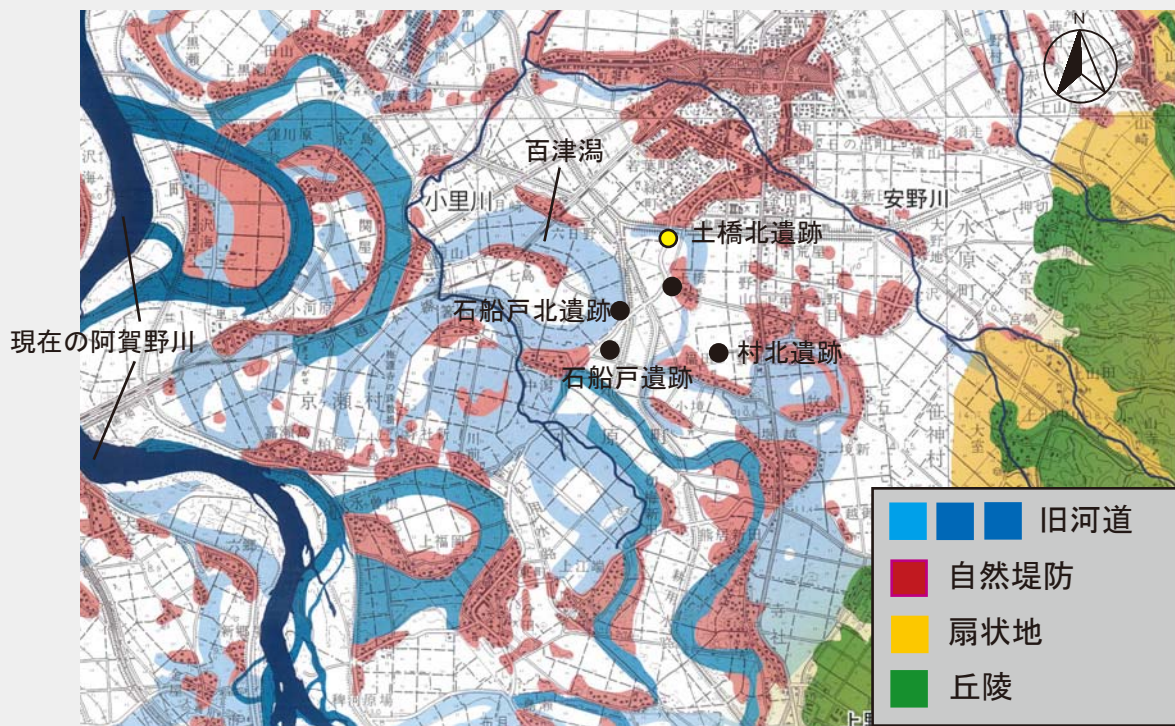
また、第3図で示された旧河道は、昔の阿賀野川のような大きな川跡になります。小さな川跡は示されていません。ところが、最近実施した遺跡発掘調査では、大きな川だけでなく、小さな川跡がいくつか見つかっています。



第1図 発掘調査のようす



第2図 川跡の検出状況（北東から）



第3図 遺跡周辺の地形分類図（建設省 1984 より作成）

### 3. 発掘調査で見つかった川跡

土橋北遺跡のほか、昨年度調査を行った石船戸北遺跡、昨年度から調査が続いている村北遺跡でも川跡が見つかっています。

石船戸北遺跡では百津潟（昔の阿賀野川）の一部が見つかりました（第5図）。埋まった土から出土した種子などの年代測定を行った結果、大きく3つの時代に分かれることが明らかになりました。いちばん下の層は平安時代、中間の層は鎌倉～室町時代、上の層は江戸時代に堆積した層となります（第6図）。

村北遺跡でも川跡が見つかっています（第7図）。川跡からはトチやクルミなどの木の実がたくさん出土しました。今年度の調査では縄文時代後期（約4,500年前）の土層が川へ向かって落ちこむことから、縄文時代から流れていた古い川の可能性もあります。

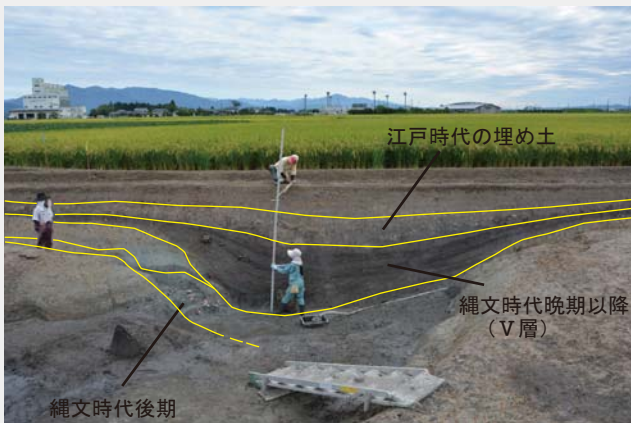
土橋北遺跡の川跡は、いちばん下の川べりに縄文時代後期の土器が出土しています。この後、縄文時代晚期（約2,500年前）の生活面であるV層が落ち込み、流木や植物片を含みます。この上には植物片を含む黒い層が見られます。このことから、縄文時代晚期以降は川が埋まりはじめ、湿地のような環境であったことが想像されます。この後、江戸時代には湿地が埋め立てられ始めたことがわかりました（第4図）。

このように、発掘調査によって石船戸北遺跡で見つかった大きな川跡のほか、村北遺跡・土橋北遺跡のような、現在ではその痕跡が確認できない小さな川跡も見つかっています。また、村北遺跡・土橋北遺跡の川跡は、その方向から百津潟に向かって流れていたことも考えられます。

### 4. まとめ

村北遺跡・土橋北遺跡では、縄文時代後期から百津潟に注ぎ込む小さな川が流れていて、阿賀野川をつくる元になった可能性も考えられます。石船戸北遺跡では、百津潟が平安時代に阿賀野川の本流であったこと、鎌倉～室町時代では潟になっていたこと、江戸時代には、川跡を埋め立てて田んぼがつくられたことなどがわかりました。

昔の人びとは水辺にムラをつくり、江戸時代以前は川魚や水辺の植物など、川の恵みを利用していたものと考えられます。土橋北遺跡では、どのように川の恵みを利用していたのか、これからの調査で明らかにしていきたいと考えています。



第4図 土橋北遺跡（川跡の土層断面）



第5図 石船戸北遺跡（百津潟）



第6図 石船戸北遺跡（百津潟 土層断面）



第7図 村北遺跡の川跡